

週刊センターニュース No.182



第182号（2007年11月12日）毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL：http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第164回共同学習会のご案内 ○●○

日時：2007年11月15日（木）16時30分～18時

場所：角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

報告者：佐藤正英（総合メディア基盤センター）

テーマ：国際シンポジウム「高等教育における教員のICT活用による教育力向上に向けて」

参加報告

○●○「比治山大学高等教育研究所開設記念特別講演会 ―FDの到達点と展望」参加報告○●○

10月10日（水）、広島市内にある比治山大学において、「優れた教育研究とFDの関係を探る－初年次教育を中心に」というテーマで、絹川正吉氏（国際基督教大前学長）の講演会が開催された。国立大学のセンター群や、首都圏及び関西圏の主な有力私立大学に設置されている関連センターの事情と比べると、一地方大学（医学系を中心に、理系主体の私立大学は除く。センターニュース169号参照、2007年7月30日付）で高等教育に関する専門センターが置かれるのは珍しいと思われる。当該研究所ニュースレター（第一号、2007年10月1日）によれば、「本学を取り巻く社会的諸環境の変化に対応しつつ、地域社会から必要とされる大学作りを推進していくことが不可欠の課題（中略）課題を達成するためには、『経験と勘』による従来型の改革では対応が次第に困難に（中略）教職員が自らの大学を客観的に研究する力、すなわち『研究力』が不可欠ではないか」と考え、研究所設置の運びとなったということである。全入時代を迎え、「大学淘汰」への危機意識がとくに強い地方所在の単科・文系主体型の私立大学関係者は、導入教育、到達目標型教育の充実、学生支援体制の強化をはじめ、質の高い教育サービス提供に向け、研究所への期待は大きいであろう。

前置きが長くなったが、絹川氏の講演は、初年次教育の背景と最近の大学教育に関わる議論（「学士力」など）、特色GP採択事例の紹介、学士課程教育のアウトカムについての解説（と批判）、スカラシップとFDと多岐にわたった。まず『大学時報』（2007年9月号）掲載の佐々木俊三氏による現代若者像の描写を引用し、何事にも無関心で、問題関心の類型化に流れ、コミュニケーションの深み、喜怒哀楽の豊かさを示し得ない、しかし存在の不安から授業にはまじめに出席する学生（北海道大学生意識調査、2006年）を相手に、大学が彼（彼女）らを社会に参入させるための準備教育、基礎教育にその使命を変えている状況におかれているという。そして、中核的なものに対してのサプリメントであった初年次教育が、今や学士課程の中心に取り込まれることになったというわけである。

次に初年次教育の実践例として、玉川大学の一年次セミナー（特色GP採択）を取り上げ、そこでは担当教員全員が新しい概念を理解しその「意義と価値」を共有し、大学全体で取り組もうとしていること、コアFYE教育センターを設置し、一年次教育とコア教育の教育内容・方法の開発実施を担当させ、全学共通に関わる定期試験問題、学習教材等の作成も行っていること、教学部やキャリアセンター等関連部署からの資料提供や協同の授業コンテンツ開発、学生センターによる最新の学生実態調査（リサーチ）の成果に基づく生活指導など、全学からしっかり支援・協力を得ていると説明した。またセンターが編集した共通テキスト『大学生生活ナビ』（初年次教育に相当に力を入れている私立大で同種のテキスト開発・活用が進んでいる事情はご承知の通りと思う）の内容（例えば「2. 効果的に学

習する、3. 時間を管理する、・・・10. ライフデザインとキャリアデザイン」)に触れたが、こうしたテキストの汎用性さらに一年次セミナーの標準化の可能性については留保をつけた。このような先進的な取組に対し一定の評価を与えているものの、がしかし魅力的な一年次教育を提供しているから学生が集まるという経営問題ではなく、日本の場合はユニバーサル化対応にあるということを絹川氏は指摘する。

一方でコンピテンシー論やジェネリックスキル(どんな職業にも転移可能な汎用的能力)論に関する近年の議論を踏まえ(先の中教審大学分科会「学士課程教育の在り方に関する小委員会」経過報告もコンピテンシーを強調しているとみてよいだろう)、知識・スキルの運用能力の開発に関わる次元の導入が大学教育の特色として期待される状況と、初年次教育の中核がこうしたスキルやアクティブラーニングを過度に強調する傾向を持ち併せていることに流されて、学士課程教育の目的がジェネリックスキル(の涵養)に限定されてはならず、大学教育の目標達成の道具であるに過ぎないこと、またそうした能力が一年次教育の内容として特化するのではなく、ディシプリン(各専門科目)の学習を通じて練磨されるべきであることを強調した。これらの点に注意した上で、自分の大学の学生の背景・資質に対応する初年次教育の内容さらに進んで大学教育のアウトカムズに影響する要因を探るために、institutional researchや「学生調査」が必須であると述べ、それを基に各大学固有の条件により編成していくべきであると絹川氏は主張する。

最後に、スカラシップとFDの話で、この部分は講演会のテーマにも直接関わるものであると期待したが、時間不足で残念ながら詳しく触れられなかった。ただ限られた内容の中で、注意を引いた点は、Teaching(教育)を学問研究と同格に位置づける文化を推奨し、教育と研究の葛藤から大学教員を解放するという主張(これが大学教授職の学識を哲学的に問うたアーネスト・ボイヤー(カーネギー教育振興財団会長歴任)の本旨とされる)が、大学教員により具体的に理解されるための内容解明と実践提示に向けて、その運動として、全米で「スカラシップ オブ テーチング」(通称 SOTL)が急速に広がっているという点である(日本でいうFDの別名とも捉えられるが、内容的に少々異なっているようである。全米の大学で、Center of SOTLが競って設置されているようである)。

(文責 評価システム研究部門 渡辺達雄)

〇●〇 新着図書・資料のお知らせ 〇●〇

大学教育開発・支援センター図書室(総合教育棟南棟6階 613号室、センター共同室の向かいです)に、以下の図書が入りました。是非ご活用下さい。

- ・ 大学評価文化の展開-分かりやすい大学評価の技法、川口昭彦著、大学評価・学位授与機構編、ぎょうせい、2006年
- ・ Faculty Development Handbook Vol.3 ~もっと!学生を元気にするために~、2006年
Faculty Development Handbook Vol.2 ~もっと!!授業をよくするために~、2005年
Faculty Development Handbook Vol.1~もっと!!授業をよくするために~、2004年
愛媛大学教育企画室編
- ・ 高大連携とは何か: 高校教育から見た現状・課題・展望、勝野、頼彦、学事出版、2004年
- ・ 私立大学学生生活白書 2007 日本私立大学連盟学生委員会編、日本私立大学連盟、2003年

〇●〇高等教育に関連する研究会・セミナー情報〇●〇

- ・ 11月22日(土) 18:00~20:30 第34回公開研究会「大学院改革と専門職大学院」

(私学高等教育研究所)

会場: 私学会館(アルカディア市ヶ谷)6階 「阿蘇の間」(東京都千代田区九段北4丁目2番25号)

講師: 藤原章夫(文部科学省高等教育局専門教育課長)、伊藤文雄(青山学院大学事顧問)、

天野郁夫(東京大名誉教授)

申込み: 私学高等教育研究所 FAX: 03-5211-5224 E-mail: info@riihe.jp

※詳細は、http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/kenkyukai/no_34.html を参照